

〈書評〉

笠間千浪編著

『〈悪女〉と〈良女〉の身体表象』

近江美保（人間科学部・法学部非常勤講師、法学研究所特別研究員）

まずは、タイトルから魅力的な本である。「悪女」と「良女」って、外見からわかるのだろうか？

序文にあるように「悪女」を表す言葉は多く、「悪女」は非難されると同時に、男も女をも魅了する。これに対して「良女」とは、「教科書」すなわちジェンダー秩序、なかでも性規範に従順な女性（像）を意味する。したがって、その対立概念としての「悪女」は、教科書に背いているとみなされる女性（像）として定義されるわけである。一方、男性像にはこのような性秩序にもとづく二分法は存在せず、多様性が受け入れられている。なぜ、女だけが「悪女」と「良女」に分けられるのか。なぜ、世間は「悪女」（と「良女」）を語りたがるのか。なぜ、「悪女」は女性にとっても魅力的なのか。早速、アタマの中が楽しい興奮に包まれる。もっとも、私の専門は国際法であり、本書の著者の方々とフェミニズムやジェンダーへの関心を共有しているとはいえ、文学的、芸術的な表象を読み解く力が十分ではないことをお断りしておかなくてはならない。

第1章は、『風と共に去りぬ』でスカーレットの corsage を締めていた女性奴隷マミーの身体が意味するものを、米国の奴隷制擁護あるいは反対のために書かれた小説の流れの中から読み解く。私はマミーが奴隷であることは認識していたが、恥ずかしながら、白人奴隷主が女性奴隷に産ませた子どもは「黒人の血が一滴でも混じれば黒人」という「一滴主義」によって奴隷とされることは、最近知った。マミーの「黒く巨大」な身体は、白人奴隷主による性的虐待とその結果として生まれた混血奴隷の存在や奴隷の過酷な生活環境

を隠蔽し、十分な食料を得て奴隷主家族の中で幸せに働く奴隷像を象徴している。マミーのように奴隷主家族と非常に近い位置にある乳母としての奴隷像は、奴隷制擁護の「強力な武器」であったという。白人中心的な奴隷制のイメージを破ったのは元奴隷自身が著したスレイブ・ナラティブであるが、そこには「親切な」奴隷主と「分かちがたき」関係にある乳母は登場しない。乳母という女性特有の役割を与えられながら、一方で女性であるがゆえに「繁殖」の手段とされた性的存在であることは否定され、純粹で満ち足りた黒人奴隷として描かれるマミーの背後には、「明日は明日の風が吹く」と大地を踏みしめるスカーレットの物語からは見えない「もうひとつの」物語が存在するのである。

第2章は、「悪女」の代名詞でもあり、多くの芸術家にインスピレーションを与えてきた『サロメ』を取り上げる。サロメを題材とする様々な作品には、ジェンダー秩序への挑戦が見られるというが、とりわけ女性であり同性愛者であり、新しいパフォーマンスの形態を作り出したアーティストでもあるロイ・フラール（1862-1928年）のダンス・パフォーマンスは、サロメに「なる」という「トランス・パフォーマンス」によって、身体に刻み込まれたジェンダーや歴史を表現しようとする現代のパフォーマンスに通じる概念を生み出した。サロメとフラールという「悪女」の出会いが新たな可能性を生み出したのだろうか。

第3章は、ドイツ、バウハウスのマリアンネ・ブランドのフォトモンタージュについての論考である。ブランドは、前衛的なバウハウスで才能を評価されながらも、なお直面した不自由さを様々

な女性の写真を切り抜き、貼り合わせることで表現した。自身の経験を客観的に表現するとともに、そこから同時代の女性を取り巻く社会的問題を糾弾するものとして位置づけられる作品は、まさに「The personal is political」の叫びに他ならない。

第4章では、日露戦争以後に相次いで創刊された婦人雑誌が消費文化を広めていく過程と、主婦とモダンガールという2つの女性のカテゴリーの変遷が論じられる。現在まで続く女性雑誌における記事と広告のタイアップや通信販売というシステムが、1910年代にすでに存在し、多くの利用者を得ていたことには驚かされた。また、婦人雑誌上では、断髪洋装のモダンガールについて、消費とエロチシズムのみを体現したかのような「いわゆるモダンガール（モガ）」と、自分なりの見解を持ち、男性と対等に意見を交わせる新しい女性としての「真のモダンガール」をめぐる、当時の識者の議論が揺れ動く。「良き消費者」としての主婦と「悪しき消費者」としてのモガは消費を介して対照されるが、本章が指摘するように、これらの議論は、外見・内面の両方において両者を区別することが根本的に不可能だったことを表しており、近代的な生活規範が日常生活の中に浸透することに対する抵抗でもあった。消費文化の進展とともに、従来の枠組みではとらえきれない新しい存在へと女性像が変化させられただけでなく、女性自身も変化したのである。

第5章は、占領期日本の娼婦の表象が、米国と日本の占領国・被占領国としての関係と両国のジェンダーとの交差のうえに形成されていることを示している。「ベビサン」としての日本女性を見る米兵と、「パンパン」という肉体的な存在となった女性を再度手懐けなくてはならないと考える「日本の男」の間を媒介するのは、「敗者の贈り物」としての女性である。男性が作ったイメージ

どおりの女性像や男女の関係は、時に「意図せざる亀裂」を見せるが、そうした亀裂を提示するのは女性である。「勝者側の男だったとしても、その男性性は常に脅かされている」（230頁）のであり、その危ういバランスは、実は女性によって保たれているということなのかもしれない。本章によれば、占領期以降も日本人男性の男性性ないしナショナル・アイデンティティ「回復」の試みは終わっていないという。日本の女性の地位が世界で101位に位置づけられる（世界経済フォーラム「ジェンダー・ギャップ指数」2012年）現状は、こうした男性の不安定さの反映なのだろうかという思いが頭をよぎった。

第6章のテーマは誰もが知っている赤ずきんだが、ここで取り上げられるのは、フェミニズムを経て、赤ずきん自身が狼に変身したり、女性と狼が組み合わさって伝統的な物語の枠組みの外に歩み出すものへと書き換えられた物語である。無垢な少女であると同時に母の言いつけを守らなかった「悪女」でもある赤ずきんは、環境問題への関心から新たなイメージを獲得した狼と共謀することで、「良女」と「悪女」というステレオタイプや男性中心社会のあらゆる二項対立から抜け出し、男性中心社会の周縁たる森へ入っていく。「『古いボトルに新しいワインを詰め』で、新しいワインの圧力で内側からボトルを破裂させる戦略」（246頁）が示されるさまにわくわくさせられた。

冒頭の疑問に戻れば、「悪女」と「良女」を描くことで、（男性）社会は自らの意志を示し、存在意義を確認している。世間が「女」を放っておいてくれないのは、そのためであろう。また、性規範のみならず、より広範な既成概念をも逸脱し変えてしまうパワーを持つがゆえに「悪女」は女にとっても魅力的なものであり、「良女」は、実は「悪女」予備軍なのかもしれない。